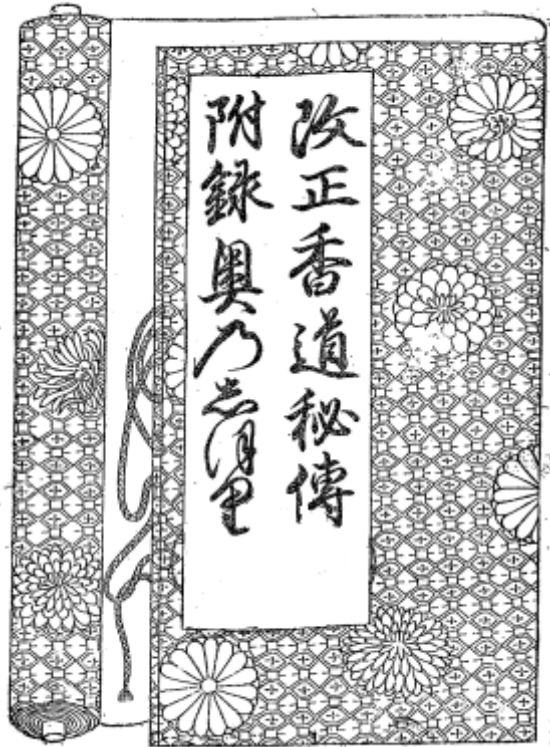




改正香道秘傳書

附録奥乃志保里

大枝流芳校正 元文四年 二卷四冊 版本

大阪府立図書館 所蔵

刻校正香道秘傳題辭

衆枝各 有法有法者有道。其道據何模
先覺之書。先覺且徂。言岐旨隱。
雖為其書三寫而成魯魚。使晚進迷津。
余多年樂此道。時探四方舊卷。校之正
之而藏笥。近書房巧鏤。因再叙舊聞。參
以新得。尚恐瑕類未除。豈為大方。引削
方竹杖。添蛇足。嘲乎。庶幾事明者訂之。

刻校正香道秘傳題辭

衆枝、各法有り。法有れば道有り。其の道、何の模楷に據(拠)らん。當に先覺の書を讀むべし。先覺すでに徂き、言岐し、旨隱る。其の書、有りと雖も三たび寫(写)せば魯魚を成し、晚進(後進)をして迷津せしむ。

余、多年此道を樂しみ。時に四方に舊(旧)卷を探し。之れを校し、之れを正して笥に藏す。匠書房、鏤(鏤)を巧(巧)う。因つて再び舊聞を叙し、

以つて新得す。尚、瑕類の未だ除かざるを恐る。豈に大方の為方竹杖を引削し、

蛇足を添え嘲らんや。

幸いに明なる者、之れを訂せんことを庶幾(こいねが)う。

校正香道秘傳書

凡例

一 此書は古来先達の筆記せる書、八部を合壁して『香道秘傳書』と号し、梓にちりばめぬ。古来、この道の奥秘を書き傳えて、香道の径なるものにして、甚だ秘すべき書なるを誰がかくみだりに世にも(漏)らしけん。然れども梓に行う

の、内校正と称せざるに孟浪に傳寫し、後人の細註、本文に混じ、或いは文字「烏、馬、馬」の誤り、脱漏のみ多し。今、四方に類書数部を集め、校正し侍る。書中、解しがたきことは、附録に辯ず。

上卷
一 雪月花集一卷

校正香道秘傳書

凡例

一 この書は、古来先達の筆記せる書、八部を合壁して『香道秘傳書』と号し、梓にちりばめぬ。古来、この道の奥秘を書き傳えて、香道の径なるものにして、甚だ秘すべき書なるを誰がかくみだりに世にも(漏)らしけん。然れども梓に行う

の時、校正を加えず、孟浪(まんらん)に傳寫し、後人の細註、本文に混じ、或いは文字「烏、馬、馬」の誤り、脱漏のみ多し。今、四方に類書数部を集め、校正し侍る。書中、解しがたきことは、附録に辯ず。

上卷

一 雪月花集 一卷

右は御家の六十六種の名香、その外
百三十種の名香、京極道譽所持
の名香、百七十七種の名目なり。御家
より乞い求めて、志野宗信写して家に
傳うる書なり。古板、下巻の第二に入る
といえども、御家の古書たるによりて、
写して上巻の第一におく。

一 志野宗信筆記 一卷

右は宗信筆記せるものなり。八十八箇
條ありて、この道の規矩とすべき書なり。
この書、古板上巻の始めにありといえども、
今、第二にうつす。

右は、宗信筆記せるものなり。八十八箇
條ありて、この道の規矩とすべき書なり。
この書、古板上巻の始めにありといえども、
今、第二にうつす。

一 香合式

右は宗信筆記しお(置)きしを宗温、省
巴と代々傳えて、また、省巴、門人へ傳えし時、
この書の奥書を添られしと見え

一 香合式

（三）主系傳記上ハハ
 有り後代香合の定式なるもの
 あり此時乃香之記は夢庵子の判
 の詞書西三条内府公に跋ふ別は
 一巻ありて家へ傳ふ
 一宗温六十一種香名一巻
 右は宗信の子宗温の筆記し置かれ
 し香名なり。世上に六十一種の香
 と云ふものはなり

下卷

一宗入香爐圖一卷
 右は炭翁齋（きゆうおうさい）宗入香炉並びに飭の
 記にして後世の規矩たるものなり。この
 書古板下卷の終りにあり。今、下卷の
 始めにうつす。宗入は、宗信が末流の
 人なり
 一建部隆勝香之記一巻

たり。後代、香合の定式なるもの
 なり。この時の「香之記」は、夢庵子の判
 の詞書、西三条内府公の跋等、別に
 一巻ありて家に傳う。

一宗温六十一種香名 一巻

右は、宗信の子、宗温の筆記し置かれ
 し香名なり。世上に六十一種の香
 と云うものこれなり。

下卷

一宗入香爐の図 一巻

右は、炭翁齋（きゆうおうさい）宗入香炉並びに飭の
 記にして、後世の規矩たるものなり。この
 書、古板下の巻の終りにあり。今、下巻の
 始めにうつす。宗入は、宗信が末流の
 人なるべし。

一建部隆勝香之記 一巻

右ハ志野末流、建部氏の筆記なり
その事、宗信と大同少異あり。また、古
法を考へべきにたよりあるものなり。
古板は上巻の終わりにあり。今、下巻第
二にうつす。

一十組香之記一卷

右十組香ハ古来よりあり来たりしを
細川幽齋子始て文となして筆

記し給ふものなり。余が家に傳うる所の
ものは、細川氏真名序あり。「系図香」は、
後世は図に名目を付くれども、これは、後人
の作にして、據（よりどころ）もなき事なれば、今、
古法のままにして、これを補わず。「源平
香盤立物の図」古板は略にして、初
心の人辯じがたし。因つて、今、詳しく絵
図となして補入す。本書は古板の

右は、志野末流、建部氏の筆記なり。
その事、宗信と大同少異あり。また、古
法を考へべきにたよりあるものなり。
古板は上巻の終わりにあり。今、下巻第
二にうつす。

一十組香之記 一卷

右十組香は、古来よりあり来たりしを
細川幽齋子、始めて文となして筆

記し給うものなり。余が家に傳うる所の
ものは、細川氏真名序あり。「系図香」は、
後世は図に名目を付くれども、これは、後人
の作にして、據（よりどころ）もなき事なれば、今、
古法のままにして、これを補わず。「源平
香盤立物の図」古板は略にして、初
心の人辯じがたし。因つて、今、詳しく絵
図となして補入す。本書は古板の

(二) 香之記 一巻
中、是とあると名所香ふ香ふ
内を盤の類うつと云ふは源平香ふ
のを用ふべきの圖はさうさう
けす組香古板下巻の中より
今下巻第三にうつす

一 香之記 一巻

右香之記は誰人の作たる事をし
らず。志野氏、建部氏の事をし
ば云う

といふも、たしかに正傳ある人の作
なるべからず。その中いふかしき事多し。
殊に初張(しやうちよう)の一紙、甚だ疑うべし。その中、また
益あることも多し。これもまた、古書な
れば、みだりにけずりさらんに忍びず、
下巻の終わりにうつす。その論は、條下及び
附録に辯ず。

一 八部の書毎の終りに考正異同の考

ま、これを存す。「名所香」に兼ね用ゆる
時は、盤の趣かわれり。ただ、「源平香」に
のみ用ゆるは、この本の図にしたがうべし。
この十組香、古板下巻の第四にあり。
今、下巻第三にうつす。

一 香之記 一巻

右、香之記は誰人の作たる事をし
らず。志野氏、建部氏の事、しばしば云う

といふも、たしかに正傳ある人の作
なるべからず。その中いふかしき事多し。
殊に初張(しやうちよう)の一紙、甚だ疑うべし。その中、また
益あることも多し。これもまた、古書な
れば、みだりにけずりさらんに忍びず、
下巻の終わりにうつす。その論は、條下及び
附録に辯ず。

一 八部の書毎の終りに考正異同の考

と附と齋板乃張るものハ他本に
照し合せて改まるものあり是ハ圖と
付る他本に異なりてづきう是る
事とちづるものハ圖とハ文の
うへにふ付て考正あるハ辨
ども板乃誤他本の異同とつら
やとちづるものなり

一附録奥乃栞二卷

右ハ本書八部の中解しき事又
ハその解きよのづく初心の人にて
なり

大枝流芳記

を附す。舊板に誤るものは、他本に
照らし合せて改まるものなり。これには、圍み(かこみ・□)を
付くる。他本に異にして、いずれか是(ぜ)なる
事をしらざるものには、圈(まる・○)※を本文の
かたわきに付けて、考正にこれを辯
ず。古板の誤り、他本の異同をわかち
やすからしむるものなり。

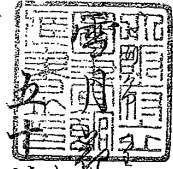
※ 本書では傍線で示します。

一附録奥乃栞二卷

右は本書八部のうち、解しがたき事、また
はその餘意をのべて初心の人にた
よりす。

大枝流芳記

香道秘傳書校正卷上



雪月花集

大枝流芳校正

神樂

立舞袖

ろう

林下

薄紅葉

山陰

かがみ

早梅

榊

上馬

人

そりう

香道秘傳書校正卷上

雪月花集

大枝流芳校正

五十種之内

神樂(かぐら) 立舞袖(たちまうそで) 榊(さかき)

はう 林下(りんか) 上馬(のぼりうま)

薄紅葉(うすもみじ) 山陰(やまかげ) 人(ひと)

かがみ(かがみ) 早梅(そうばい) そりう

太子	十種之香	蘭奢待	逍遙
中川	麒麟	久菊	中川
雪	杜若	面影	似
金伽羅	斜月	立田	おきな
千鳥	般若	二葉	白鷺
笛	うかくぼく	わげ	都
夏草	なごし	杜若	面影
羅し津	須磨	明石	あかし
麒麟	きりん	孔雀	くじやく
中川	なかがわ	葦垣	あしがき
久菊	ひさぎく	新枕	にいまくら
中川	なかがわ	小糸	こいと
雪	ゆき	奈良芝	ならしば
金伽羅	きんきやうら	面影	おもかげ
斜月	しゃげつ	似	にたり
立田	たちだ	黛	まゆずみ
千鳥	ちどり	二葉	ふたば
般若	はんにや	うかくぼく	
笛	ふえ	般若	はんにや

笛(ふえ) 般若(はんにや) うかくぼく
 千鳥(ちどり) 二葉(ふたば) 白鷺(しらさぎ)
 おきな りんせう(りんしよう) あげまき
 立田(たちだ) 黛(まゆずみ) 都(みやこ)
 斜月(しゃげつ) 似(にたり) 芙蓉(ふよう)
 金伽羅(きんきやうら) 面影(おもかげ) かるかや
 なごし 杜若(かきつばた) はしくろ
 夏草(なつくさ) 雪(ゆき) 奈良芝(ならしば)
 羅し津 須磨(すま) 明石(あかし)
 麒麟(きりん) 孔雀(くじやく) ゑも木(えもぎ)
 中川(なかがわ) 葦垣(あしがき) おぼろ
 久菊(ひさぎく) 新枕(にいまくら) うつり香(うつりが)
 中川(なかがわ) 小糸(こいと)
 已上
 十種之香
 太子(たいし) 蘭奢待(らんじゃたい) 逍遙(しょうよう)

清香 白石 八重菊 新樹 若菜 三芳野 日影花 有明 夕時雨 薄雲 大井川 地々見 雪埜 初菊 初瀬 明石 手向 探梅 清香 玄々	右御家之香次第 名香目錄	三吉野 紅沈 古木 中川 法花 花橘 八橋 已上 追加六種 園城寺 念珠 沈外 赤梅檀 丹霞 仏座 已上
--	----------------------------	---

三吉野(みよし)の 紅沈(こうじん) 古木(こぼく)

中川(なかがわ) 法花(ほっけ) 花橘(はなたちばな)

八橋(やつはし) 已上

追加六種

園城寺(おんじょうじ) 念珠(ねんじゆ) 沈外(じんがい)

赤梅檀(しやくせんたん) 丹霞(たんか) 仏座(ぶつざ)

已上

右御家之香次第

名香目錄

日影花(ひかげのはな) 有明(ありあけ) 夕時雨(ゆうしぐれ)

薄雲(うすぐも) 大井川(おおいがわ) 地々見(ちぢみ)

新樹(しんじゆ) 若菜(わかな) 三芳野(みよしの)

雪埜(ゆきの) 初菊(はつぎく) 初瀬(はつせ)

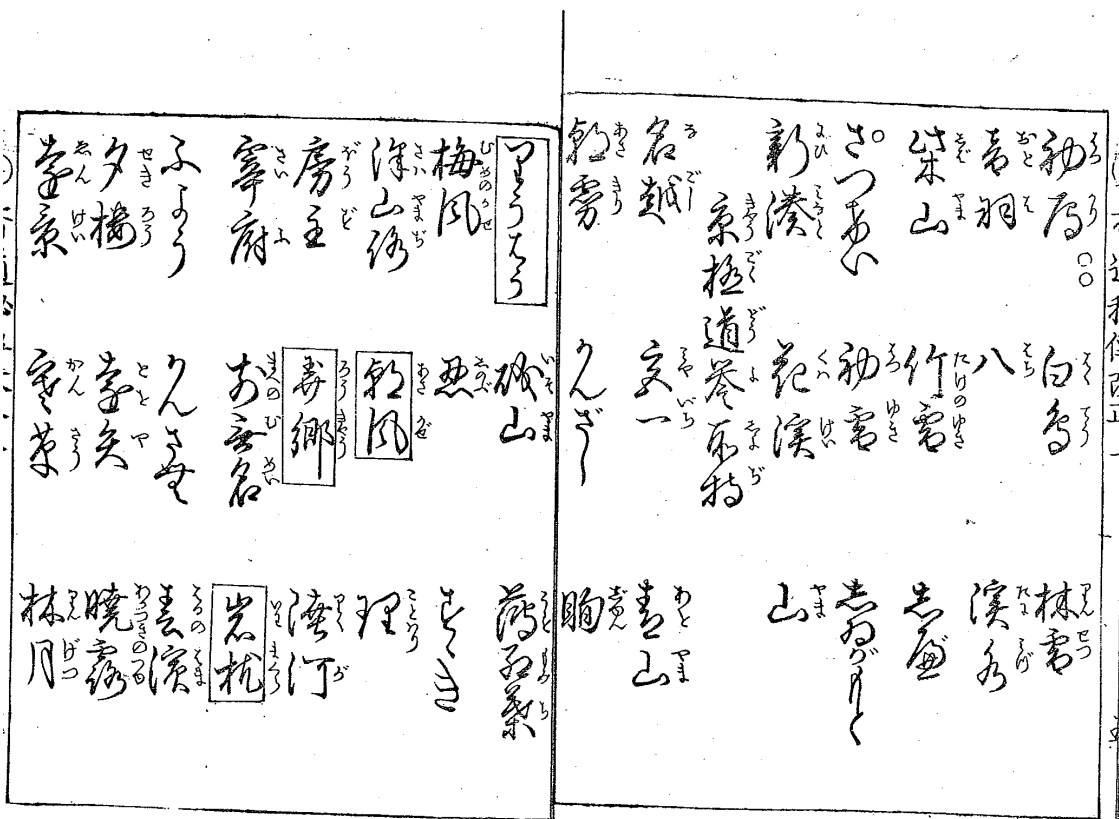
明石(あかし) 手向(たむけ) 探梅(たんばい)

清香(せいこう) 八重菊(やえぎく) 玄々(くろげん)

松乃戸	三ヶ月	野々宮	立舞袖	塩屋	富士煙	訪友	仙	杜若	玉蘭	よこ雲
松乃戸	三ヶ月	野々宮	立舞袖	塩屋	富士煙	訪友	仙	杜若	玉蘭	よこ雲
松乃戸	三ヶ月	野々宮	立舞袖	塩屋	富士煙	訪友	仙	杜若	玉蘭	よこ雲
松乃戸	三ヶ月	野々宮	立舞袖	塩屋	富士煙	訪友	仙	杜若	玉蘭	よこ雲

松乃戸(まつのと) りむかく すう野(すうの)
 おけ 三ヶ月(みかづき) 湘竹(しょうちく)
 ふじ 野々宮(ののみや) 摘(つむ)
 神楽(かぐら) 立舞袖(たちまうそで) 塩屋(しおや)
 ふよう 庭梅(にわうめ) 富士煙(ふじのけぶり)
 はんとう 古(いにしえ) 訪友(ほうゆう)
 玉蘭(ぎよくらん) 立田(たつた) 仙(そま)
 よこ雲(よこぐも) 杜若(かきつばた) 山こし(やまこし)

くす玉(くすだま) 五月雨(さみだれ) ながらの橋(ながらのはし)
 あやめ 水蓼(すいりょう) 初秋(はつあき)
 逢坂(おうさか) 夕霧(ゆうぎり) 唐衣(からころも)
 まがき こじま 荊萱(かるかや)
 夕暮(ゆうぐれ) 小春(こはる) 山陰(やまかげ)
 蔦花(つたのはな) 幽蘭(ゆうらん) 婆女(ばば)
 手枕(たまくら) 名越(なごし) 十九(ねりもこ)
 転寝(うたたね) 松風(まつかぜ)



(はつかり) 白鳥(はくちよう) 林雪(りんせつ)

音羽(おとわ) ハ(はち) 溪水(たにみず)

柴山(しばやま) 竹の雪(たけのゆき) しべ

さつけい 初雪(はつゆき) しいがもと

新湊(にいみなと) 花溪(かけい) 山(やま)

京極道譽所持

名越(なごし) 宮一(みやいち) 青山(あおやま)

朝霧(あさぎり) かんざし 胸(じゆん)

りうはつ 磯山(いそやま) 薄紅葉(うすもみぢ)

梅風(うめのかぜ) 忍(しのぶ) すすき

澤山路(さわやまじ) 朝風(あさかぜ) 理(ことわり)

房主(ぼうず) 弄郷(ろうきよう) 陸河(りくが)

宰府(さいふ) 前無名(まえのむめい) 岩枕(いわまくら)

ふよう かんさむ 春濱(はるのはま)

夕桜(せきろう) 遠矢(とおや) 暁露(あかつきのつゆ)

遠景(えんけい) 寒草(かんそう) 林月(りんげつ)

凌波 林鐘 篠目 河淀 吐月 風絮 白浪 梅 六月 霜夜 簞江 炭松 味茶 深路 端午
 雪江 洞庭 竹馬 柳花 雲抄 雪中 踏花 早梅 春水 初音 海棠 長安 雨夜
 柳花 雲抄 雪中 踏花 早梅 春水 初音 海棠 長安 雨夜

凌波(りようは) 雪江(ゆきのえ) 洞庭(どうてい)
 林鐘(りんしょう) 枕(まくら) 竹馬(たけうま)
 篠目(しのめ) 溪竹(けいちく) あやめ
 河淀(かわよど) 芳村(ほうそん) 竹葉(ちくよう)
 吐月(とげつ) 小雪(こゆき) 桂嵐(かつらのあらし)
 風絮(ふうじょらく) 庭桜(にわざくら) 早苗(さなえ)
 白浪(しらなみ) 晩花(ばんか) 漏月(ろうげつ)
 秋風(あきかぜ) 紅葉(もみじ) 塩路(しおじ)

老梅(ろうばい) 露菊(つゆぎく) 寒梅(かんばい)
 六月(おほらい) 雲抄(うんしょう) 柳花(りゅうか)
 霜夜(しもよ) 雪中(せつちゅう) 春鐘(はるのかね)
 簞江(こもりえ) 踏花(とうか) 薄氷(うすこおり)
 峯松(かみしょう) 早梅(そうばい) 杜若(かきつばた)
 秋草(あきくさ) 春水(しゅんすい) 海棠(かいどう)
 深山路(みやまじ) 初音(はつね) 羽衣(うい) 長安月(ちやうあんのかき)
 端午(たんご) 鷓首(げきしゅ) 雨夜(あまよ)

節柴 葵 冬松 寢覚 夏蕙 送春 丹楓 星合
 濱楸 春草 清水 竜頭 尾上 暗香 夕月 鶴川
 御船山 藤花 花陰 簪 唐絹 江柳
 松花 花陰 簪 唐絹 江柳
 花林 万代 埋木 海月 村雨 鳳毛 宮梅 一聲
 松雪 曙 林雪 山風 木下 鳥羽田 春蘭 斜月
 松雪 曙 林雪 山風 木下 鳥羽田 春蘭 斜月

節柴(ふししば) 濱楸(はまひさぎ) 御船山(みふねやま)
 葵(あおい) 春草(しゅんそう) 私語(ささめごと)
 冬松(ふゆのみまつ) 清水(しみず) 藤花(とうか)
 寢覚(ねざめ) 竜頭(りゅうとう) 花陰(はなのかげ)
 夏蕙(かけい) 尾上(おのえ) 鹿嶋(かしま)
 送春(そうしゅん) 夕月夜(ゆづくよ) 簪(かんざし)
 丹楓(たんふう) 暗香(あんこう) 唐絹(からきぬ)
 星合(ほしあい) 鶴川(うかわ) 江柳(こうりゅう)

花林(はなのはやし) 松雪(まつゆき) 稲筵(いなむしろ)
 万代(よろずよ) 古郷(ふるさと) 曙(あけぼの)
 埋木(うもれぎ) 清風(せいふう) 林雪(りんせつ・林葉)
 海月(かいげつ) 山風(やまかせ) 木下(このもと)
 村雨(むらさめ) 花水(はなみず) 鳥羽田(とばだ)
 鳳毛(ほうもう) 秋芝(あきしば) 夏箕河(なつみがわ)
 宮梅(みやのうめ) 若松(わかまつ) 春蘭(しゅんらん)
 一聲(ひとこえ) 暁月(ぎようげつ) 斜月(しゃげつ)

小田守 花徑 春遊 獵雪 松風 鈴鹿 殘雪 朝明 林鶴
 玉章 宇治 松葉 片系 けいりん 庭 林下 白雲 寒月
 夕れ 窓梅 三冬 石帯 窓梅 三冬 手 庭 庭 庭 庭
 新三芳野 碧桃 送月 迦羅 女花 仙風 林葉 冬恋 冬恋 冬恋 冬恋

小田守(おだもり) 花徑(かけい) 軒梅(のきのうめ)
 春遊(しゅんゆう) 峯松(みねのまつ) 冬恋(ふゆのこい)
 獵雪(ろうせつ) 映雪(えいせつ) 五節(ごせつ)
 松風(まつかぜ) 秋山(あきのやま) 秋蓮(しゅうれん)
 鈴鹿(すずか) 紅梅(こうばい) 仙風(せんふう)
 殘雪(ざんせつ) 五更(ごこう) 女郎花(おみなえし)
 朝明(あさあけ) 送月(そうげつ) 碧桃(へきとう)
 林鶴(りんかく) 迦羅(きやあら) 新三芳野(しんみよし)

玉章(たまづさ) 夕れ(ゆうぐれ) 石帯(いしのおび)
 宇治(うじ) いふばかり 窓梅(まどのうめ)
 松葉(しょうよう) あらまし 三冬(さんとう)
 片系(かたいと) 桜(さくら) 手(て)
 けいりん 庭(にわ) 蘭奢待(らんじやたい)
 林下(りんか) 山桜(やまざくら) いんりう
 白雲(しらくも) 真木の戸(まきのと) 花雪(はなのゆき)
 寒月(かんげつ) 山下風(やましたかぜ) 法花經(ほつけきよう)

一文字

此一帖西三条前内府御本
今書写者也
彼御本飛鳥井之筆也

天正式 霜月日

志野 宗信

一文字(いちもんじ)

この一帖は西三条前の内府の御本を申し請け、
書写せしむるものなり。
彼の御本は飛鳥井の筆なり。

天正式 霜月日

志野
宗信

右西三条家御香の目録『雪月花集』
志野宗信傳写するものなり。古板本
誤り多し、古写本数部を以て校正す。その考うる拠
たのぞく

享保甲寅年正月

大枝流芳記

享保甲寅年正月

大枝流芳記

雪月花集考正

そりう 一本はの字と用ひ

そりう 一本は楚流の字と用ひ

白路鳥 異本を以て「白鷺」(しらさぎ)に改む

代黒 異本を以て「黛」(まゆずみ)に改む

考 この字誤る。よつて異本を以て「都」(みやこ)の字に改む。

なこ 異本によつて「なごし」に改む。

夏菊 一本に「菊」を「草」に作る。

羅しつ 一本に「こしつ」につくる。

足垣 一本に「葦垣」(あしがき)に作る。

火草 一本に「久菊」(ひさぎく)に作る。因つて今これを改む。

十種 香の中、肩書きに後人の細注あり。今、本文にまぎれん事を恐れて削り去る。

丹加 一本に「丹霞」(たんか)に作る。これにしたがいて今改む。

仏産 異本に「仏座」(ぶつざ)に作る。

大ぬき 或いは云う「仏の臺座」なるにより名とす。

この説によれば「産」は「座」なるべし。

雪月花集考正

はう 一本、「法」の字を用ひ。

そりう 一本、「楚流」(そりゆう)の字をもちゆ。

白路鳥 異本を以て「白鷺」(しらさぎ)に改む。

代黒 異本を以て「黛」(まゆずみ)に改む

考 この字誤る。よつて異本を以て「都」(みやこ)の字に改む。

なこ 異本によつて「なごし」に改む。

夏菊 一本に「菊」を「草」に作る。

羅しつ 一本に「こしつ」につくる。

足垣 一本に「葦垣」(あしがき)に作る。

火草 一本に「久菊」(ひさぎく)に作る。因つて今これを改む。

十種の香の中、肩書きに後人の細注あり。

今、本文にまぎれん事を恐れて削り去る。

丹加 一本に「丹霞」(たんか)に作る。これにしたがいて今改む。

仏産 異本に「仏座」(ぶつざ)に作る。

或いは云う「仏の臺座」なるにより名とす。

この説によれば「産」は「座」なるべし。

大ぬき 異本によつて「大ぬき」(大幣)に改む。

なご江の 異本によつて「なご江」に改む。
 また、「波野」に作る本あり。
 春濱 異本に「春溪」(しゅんけい)に作る。
 荷葉 異本に「葛葉」(くずのは)に作る。
 七夕の下、いざ宵 葛枕の二名を脱す。今これを加う。
 寸代 一本に「十代」(じゅうだい)に作る。いずれか是なる事をしらず。
 おけ 一本に「たけ」に作る。
 「庭梅」の下、富士煙、はんとう、古三名を
 脱す。今これを補う。
 「水蓼」の下、一本 初秋の一名あり。
 十九 古本かな付け誤る「ねりもこ」なり。万葉集の詞のよし。
 「初雁」の下、「手向」あり。重複ゆえ、今けずりさる。
 泊瀬 「初瀬」に同じ。前にもあり。よつて除きさる。
 さつけい 一本「まつけい」に作る。
 「新湊」の下、古本「くず枕」あり。今、真本に

より上へうつす。山の下、古本「セタ」、「い
ざ宵」の二名あり。真本によつて、今、
上へうつす。

京極道譽所持の内

りよう

異本によつて「りうはう」に改む。
また、一本に「りうよう」に作る書あり。

秋風

異本に「朝風」(あさかぜ)に作る。下に「秋かぜ」あれば、
おそらく「朝風」是ならんかによつてこゝを改む。

弄郷

異本によりて「弄郷」(ろうきよう)に改む。また、一本に
「花歸」(かき)に作るものあり。大いなるちがいなり。

岩枕

異本によりて「岩枕」(いわまくら)に改む。

枕

一本「桂」(かつら)に作る。いずれか是なることしらず。

河濱

正本によりて「河淀」(かわよど)に改む。

風絮楽

一本「楽」の字なし。

薄

古板、早苗の下「薄」あり。重複なるによりてこれを除きさる。

秋風

一本に「雄風」(ゆうふう)に作る。

露菊

正本によりて「露菊」(つゆぎく)に改む。

露菊

「露菊」の下「名越」あり。重複す。正本に
なし。これによつて今削りさる。

今削り

今削り

雲抄 一説に雲霄は仙る
 薄氷 正本に「うんしやう」に改む
 秋菊 一本に「秋菊」(あきぎく)に作る
 長安月 一本に「長夜月」(ちやうやのつき)に作る
 雨夜 一本に「雨衣」(あまごろも)に作る
 節柴 一本に「節木」(ふしき)に作る
 濱楸 楸の字古本の通りなり。今按ずるに恐らくは「荻」(おぎ)の字の誤りならんか。
 送月 正本に「送春」に作る。「送月」は、また後にあり。よつてこれをあらたむ。
 皇台 正本により「星合」(ほしあい)に改む。
 山風 一本に「嵐」(あらし)に作る。
 秋芝 一本に「秋蘭」(しゅうらん)に作る。
 花經 正本によりて「花徑」(かけい)に改む。
 冬恋 正本によりて「冬恋」(ふゆのこい)に改む。
 一本に「冬」とばかりありて「恋」の字なし。
 獵雪 一本に「曉雪」(ぎようせつ)に作る。
 現桃 正本によりて「碧桃」(へきとう)と改む。
 加羅 一本になし。恐らくは達ち(木所)を付けしが、誤りて名のごとく傳写せしか。

雲抄 一説に雲霄は仙る
 薄氷 正本に「うんしやう」に改む
 秋菊 一本に「秋菊」(あきぎく)に作る
 長安月 一本に「長夜月」(ちやうやのつき)に作る
 雨夜 一本に「雨衣」(あまごろも)に作る
 節柴 一本に「節木」(ふしき)に作る
 濱楸 楸の字古本の通りなり。今按ずるに恐らくは「荻」(おぎ)の字の誤りならんか。
 送月 正本に「送春」に作る。「送月」は、また後にあり。よつてこれをあらたむ。
 皇台 正本により「星合」(ほしあい)に改む。
 山風 一本に「嵐」(あらし)に作る。
 秋芝 一本に「秋蘭」(しゅうらん)に作る。
 花經 正本によりて「花徑」(かけい)に改む。
 冬恋 正本によりて「冬恋」(ふゆのこい)に改む。
 一本に「冬」とばかりありて「恋」の字なし。
 獵雪 一本に「曉雪」(ぎようせつ)に作る。
 現桃 正本によりて「碧桃」(へきとう)と改む。
 加羅 一本になし。恐らくは達ち(木所)を付けしが、誤りて名のごとく傳写せしか。

松葉

一本は「松葉」に改む

林下

一本は「隣家」に作る

白雲

一本は「白雲」に作る

奥書に「此一帖の下西」の字あり今正

本よりて補入す

大枝流芳校正

志野宗信筆記

香道心持之事

一たき組の香興行あらば、その人数の方へ
兼日に理（ことわり）を申し、香の数持ちて出られ、縁
をよく取り合わせてたかれ候様にあるべく候。およそ
連歌の付け合わせなどに相似候か。「雲井」
とたかれ候わば、「有明」とたき、また「うたたね」
とたく時は、「ねざめ」などとたくように

松葉

正本によつて「松葉」(しょうよう)に改む。

林下

一本に「隣家」(りんか)に作る。

白雲

一本に「白雲」(しらゆき)に作る。

奥書に「この一帖の下、「西」の字あり。今正

本によりて補入す。

大枝流芳校正

志野宗信筆記

香道心持之事(四十九ヶ条)

一たき組の香、興行あらば、その人数の方へ
兼日に理（ことわり）を申し、香の数持ちて出られ、縁
をよく取り合わせてたかれ候様にあるべく候。およそ
連歌の付け合わせなどに相似候か。「雲井」
とたかれ候わば、「有明」とたき、また「うたたね」
とたく時は、「ねざめ」などとたくように

四季の香又恋の香などいず
 れも縁とよく取り合わせたかれ候事、尤も
 にて候。さりながら、よき香ばかりはありがた
 き子細に候間、香数多く通り候時は、さ
 のみ縁にかかわられまじく候なり。
 一 当座にもよし候香には、縁を取り
 合わさず候ともたかれ候わば、然るべく候。但し、また縁をよ
 くだかれ候えば、尤も比類無き子細に候。俄か
 の興行には縁をよくよく取り合わすこと難く
 成り候間、持ち合わせの香をたかれ苦しからず候なり。
 一 四季の香と云うは、歌道不案内に候え
 ども、およそその季持ちと云うは歌道の心なるべく候。
 春は「若菜」、夏は「夏草」「かきつばた」、秋は「ハ
 重菊」「もみじ」、冬は「初雪」「寒草」などと、大
 形、この心持ちに候。恋の香に「手枕」、または「しのぶ」
 などとたく心得に候。その数、何れも多き

事ことはは一いち炷しゆ二に炷しゆ宛あてぬぬ候こうなり
 一いち上うへ々々のの香かうをを二に炷しゆ三さん炷しゆもも通とほりては「丹霞」
 「沈外」などなををたたかかれ、そのその後のち、座ざ躰たいををあら
 ため、おもおもいおもおもいにたたかかれ候こうようように
 覚さ悟ご有あるるべく候こう。このこの心こころ持も第一だいいちなり。
 一いち香かうををたたく事こと、会かい主しゆははじじめてたたき
 然しかるるべく候こう。但たゞし、座ざ躰たいにより、誰たれ々々なりとともたたかかれ
 くるくるしからしず候こう。香かう爐ろに火ひ取とる人ひと、衆しゆ中ちゆうへ
 一いち旦たん「たたかかれ候こうへ」と禮らいをを申まうし焼やくくべき事ことに候こう。聞きく
 時ときは、座ざ上じやう聞ききて一いちとおとり通とほりて、ささて、香かう主しゆ
 の前まへへ来きたり、また、おし返かへし、一いちとおとりとおとし、
 二に度ど宛あて何なんれも返かへさるるべく候こう。ささりななががら十じふ人にんより
 上うへは一いち通とほりにて置おかかるるべきなり。
 一いち香かう聞きかるる時とき、老らう若にやくとともに身みに似に合あひ候こう躰たい
 覚さ悟ご有あるるべく候こう。子こ細さい候こう。若にやく年ねんのの人ひとは香かうののこ

事に候間、一炷、二炷宛、心得の為しるし候
 なり。
 一 上々の香を二炷、三炷も通りては「丹霞」
 「沈外」などをたかれ、その後、座躰をあら
 ため、おもいおもいにたかれ候ように
 覚悟有るべく候。この心持第一なり。
 一 香をたく事、会主はじめてたき
 然るべく候。但し、座躰により、誰々なりとたかれ
 くるしからず候。香爐に火取る人、衆中へ
 一旦「たかれ候へ」と禮を申し焼くべき事に候。聞く
 時は、座上聞きて一とおり通りて、さて、香主
 の前へ来たり、また、おし返し、一とおりとおし、
 二度宛何れも返さるべく候。さりながら十人より
 上は一通りにて置かるべきなり。
 一 香聞かるる時、老若ともに身に似合い候躰
 覚悟有るべく候。子細候。若年の人は香のこ

と分別のりや、秘もこうや、やうは
香もくわうと久愛園ていふは
いふ又やういふ新ていふの
小園事もくかたふていふ執人
より香派然る名をも他人に
の神をもくわういふ久愛園
とや事不徒なり

一番聞は香炉と在へ引かたふけて聞
くはわろし。ぎんも時によりて、はしり走候。
また、香も銀の上をはしり、灰へおち
候。「蘭奢待」、返し九度焼くまで所持候を、
去る人こう(香)炉あしく持たれ候て、この名物
はしり候。十度までたかず失せ候なり。
一番爐取り上げて、鼻息荒く聞き、手にて
かおりをまねきかけきく事、沙汰の

と分別行き候とも、聊か(いささか)もこうしや(巧者)ぶりは
無用に候。かおりを久しく聞きては、大いに
わろし。また、聞きしり候躰にて、うわの空
に聞く事もうかめだてにて、不執心
に見え候てわろし。座中の老人の上
より香を感じ、名なども他人に
尋める躰尤もに候。老若ともに久しくかおり
を聞く事、然るべからず候なり。

一番聞くに香爐を前へ引きかたふけて聞く
はわろし。ぎん(銀)も時によりて、はしり走候。
また、香も銀の上をはしり、灰へおち
候。「蘭奢待」、返し九度焼くまで所持候を、
去る人こう(香)炉あしく持たれ候て、この名物
はしり候。十度までたかず失せ候なり。
一番爐取り上げて、鼻息荒く聞き、手にて
かおりをまねきかけきく事、沙汰の

かぎり有るまじき子細候なり
 一我がたぐ名香を人の感じ候うとて、ひげ(車下)し
 候言葉かりそめにも無用に候。その故は、
 香はくがい(公家)物にて候。名をばたしかに
 一度、二度とわれ候て、即ちあらわして申すべく候
 なり。
 一香通り候時、我が次の人に一礼あるべし。
 懇ろに座中へ礼義無用なり。
 一香の会とふれられ罷り出る日は、空焼き
 有るまじく候。申すに及ばず、焼物など取り扱い有る
 まじく候。懸香なども無用なり。
 一茶の湯会の時も茶過ぎて香を出すべき
 と存じ候日は、前々申すごとく、空焼、風炉、い
 ろりなどへく候事無用に候。餘所に
 ても茶の湯会に空焼なくば、必ず必ず香
 出すべきと存じ候て、兼ねてたくべき香を覚

悟るべく候なり

一香を聞く時、かうろ（香炉）の灰を見る事有るまじく候。子細候。香とおりにて以後、見らるべく候。

賞翫の人、灰をおされ候わば、香以前に所望候て見るべく候なり。

一香を聞く時、貴人御座候とも、召し出され香聞く程の身軀に候わば、座中へ入りにて聞かるべし。かりそめにもえん（縁）にて

小所望とて見るべく候なり

一香と聞時、人少候とも、座中へ入りにて聞かるべし。かりそめにもえん（縁）にて

香の通候座中にて、扇あらくつか

候事然るべからず候。惣別、扇は用捨

然るべき子細候。然れども時分によりつか候

時は、そろそろと分別ありて遣われもともに候なり。

一名香一焼きに、木がさ（嵩）を多くたく

事、大いに誤りなり。もし座中、多

人数の時、少し木がさ大きにたくべし。

事、大いに誤りなり。もし座中、多人数の時、少し木がさ大きにたくべし。

然らずんば、これ程の心持に木がさたるべきなり。

五、六人の時

「ぎんは香こがれ付く候とて、火にくべ、やく
人ありあやまりなり。何時もこがれ付き
候わば、小刀にてこそげ落として置くなり。
銀の置き取りと云うは、香ばし(筋)と指にて
ぎんの角をはさみ、香ばしを指よ
り下にして、香爐に置き取る時も同前
に候。また、指にて箸よせずにも置き取り
くるしからざるなり。
銀の寸法は九分四方にして、すみは
一分宛にとるなり。
香通り後、惣々返しをば、ぎんの上
に置きて焼き、亭主座敷のかたわき
におき申し候。置き所口傳なり。
「れうぜん香」「春日野」その外、薫物の類

焼く時をさんとうくたきと云ふなり
 名香聞時乃銀にてはかりそめにも
 なく聞あふ又香の香中ば(半)にた
 く事有るまじく候事なり。末に焼くべし。
 自然のことなり。
 一「春日野」は、聞く時心づかいあり。その故は、
 四、五人の前とおりにて必ず必ず「ぶちり」と云う
 て飛び候物に候。古もさる人の覚悟な
 く候て、あやまりを仕り候よし。その沙汰
 心得らるべく候なり。
 一「香を人に所望候時、「一たき」と云うは悪し。
 「一炷(ちゆう)御焼き候え」と所望するなり。
 一「人、香を所望の時、その時分の季の香
 尤もに候。去りながら、その国の大名はばめたる
 賞翫の人の前にては、「季の香」か
 「賀」か「上薫」が尤もに候。東山殿御小座

一新の香爐を立し、火を付く。その御座にて
 御香爐参りはじめに、拙者「焼き申せ」の
 よし御意候間、「八重垣」を焼く。いろいろ
 心づかいこれあり。口傳なり。
 一 香爐に火取りて、香爐底へ火つよくと
 おり、香爐あつく候て、持ちにくき事あり。
 その時はきれいなる物に水を入れて香爐
 を三分程底をひやして出すものなり。
 一人の新宅わたまし近き所にて香
 興行あらば、「鴨の香爐」にて聞かるべく候。
 なき所にて候とも知らざるふりにて鴨の
 香爐候わば、それにて聞かれ候て然るべく候
 よし申し候て然るべく候なり。
 一 盆にすわる香爐は、左の手にて盆
 を持ちて、右の手にてこうろをとらえ、
 座敷へ出る。また、座中にて居ながら請け

同輩のこゝろ香爐をいへたのふふ
とてたのふふ香爐の中程のわき
ふ指さしたわきの指よりさへあつた
けふ人いふたれふふははと人のふ
の下にさうさうしてたのふふ香
爐おとさぬ様に取り上げて、則ち、左の手に
すえて取るなり

下輩の人は香爐をいへたのふふ
とてたのふふ香爐の中程のわき
ふ指さしたわきの指よりさへあつた
けふ人いふたれふふははと人のふ
の下にさうさうしてたのふふ香
爐おとさぬ様に取り上げて、則ち、左の手に
すえて取るなり

一 同輩のかたへ香爐わたすは、左の手に

すえて、右の手をば香爐の中程のわき
に指さきをあつる様にそえて出す。う

け取り人は、また、左の手をば渡す人の手
の下になるようにして、右の手にて香

爐おとさぬ様に取り上げて、則ち、左の手に
すえて取るなり。

一 下輩の人に香爐出すは香爐の上

をかたてにて引つさげ候様に持ちて、そこを

請け取る人の左の手の上に置く様に渡すなり。

一 児(ちご)、若衆並びに女房衆などへ香爐渡す

時は、前へ持ちてより、畳に置いて、しさり(退)
て、手には渡さざるなり。

一 香聞くべき日、床に香爐を置き合わせには、銀

をば香爐の底と盆との間におくべし。

香合(こうば)置き合わせ候時は、下に沈、上にぎん置き

一 香合、香袋、香爐置き合わせの時は、名香
 五炷入れ、その香は、四炷は心持ち次第何なり
 とも、一炷はその季の香を入れるべし。
 一 おし板、五つかざりの香合には、沈五切れ、
 一 厚さ一分と人の尋ね候時、こたう(答)なり。ただ、
 一 香のしかるべきを入れ、名香は入れざるものなり。
 一 火をとる時、灰あたたため候。心持ち火を入れ、その
 上に灰をかけ候て、また、別の火を置きて
 少しあたたため、さて、取り出して、また別の火を前
 の穴へ切りめを上へなして入れて、かげん
 よき時、灰をかけ、おすなり。
 一 聞香爐にかざり、灰をば五合におす。
 賞翫の箸として子細候。口傳あり。

一灰をば香爐せがいより少し高くかき上げ
 ておし候。但し、灰すくなき時は、ありのまま
 に有るべきなり。また、多き時もありのままた
 るべきなり。
 一わが香焼く時、香爐立ち候か立たぬかとて、久しく
 聞き候て、本式にかおり立ち候てから人に
 渡す事しかるべからず候。少しかおり立つかと思ふ
 時分に人に渡すべし。また、こやしや火を能く取り
 て前に通る香も則ち立つとおぼし候わば、
 心み(試)せずともしかるべきなり。
 一我が焼く香、火つよき香にて立たず候事
 これあり。然らばぎんをおすは然るべからず候。その子細
 は、後に人のたく時、いかよの香を焼くべきを
 知らず候て、いかがに候。ただし、末座にては
 覚悟致さるべく候が、分別あるべきなり。
 一児(ちご)、若衆に香所望の時は、包紙ながら、

そへの人よわたりせりそへて
 一番下聞日香爐床は香合
 ては無用なりとわけてとちなり
 置き合はす事は、御座敷かざりのごとく灰お
 して置き合はせ然るべく候なり。
 一番上包紙、「枚原（杉原紙）」には無用に候。その故は
 うつりがこれある物に候なり。
 一香土包紙枚原は、いざりて人々を
 うつりがこれある物に候なり。
 一卓（しよく）並びかんばんに香爐、香合、置き合わせこれある
 時は、香爐、香合（こうば）ばかりを取りおろし、火
 を取るべし。卓もかんばんもそのまま床
 にあるべきなり。
 一中形の盆、四方盆、長盆、くつがたの盆、
 何れも盆ながら取りおろし、火をとり
 申すべく候なり。
 一風雨にて香聞く時は、風の面へ我が身を

一丁開事（こと）はなし
 一茶湯の時（とき）香興（かうきよう）行（い）これ在（あ）らば無上
 茶已（ち）後（ご）香爐（かうろ）出（で）すべき事（こと）あり
 一香袋（かうぶくろ）の緒（と）むすび様（よう）口傳（くでん）の事（こと）なり
 以上
 別而秘傳（べつにひでん）
 一香爐（かうろ）の火（ひ）つよく覚え候時（とき）は、火（ひ）つよき香（かう）を焼（や）き、「扇（あふぎ）」などの様に火（ひ）よわき香（かう）は、火（ひ）あいつよく候時（とき）は、用捨（ようし）あるべし。火（ひ）つよき香（かう）、火（ひ）よわき香（かう）の口傳（くでん）これあるなり。
 一香（かう）かおり不審（ふしん）に覚え候（しる）わば、木色（もくしき）を見る事（こと）あり。また、両種（りやうしゆ）の名物（なぶつ）は殊（こと）に木色（もくしき）迄能（あた）く能（あた）く見る事（こと）、尤（なほ）もに候（しる）。同木（どうもく）のうちにても木所（もくしよ）により、事（こと）の外（ほか）に違い候事（こと）なり。
 一香（かう）通（と）り候中程（ちゆうぢやう）に焼（や）くまじき香（かう）「沈外（しんがい）」、
 「赤梅檀（せきばいたん）」にて候（しる）。また云（い）う、この香（かう）は勝（か）れたる香（かう）通

なし、聞くべき香に候なり。

一茶の湯の時、香興行これ在らば無上。

薄茶已後、香爐出すべき事あり。

一香袋の緒むすび様、口傳の事なり。

以上

別而秘傳(三十八ヶ条と八卦香爐之図)

一香爐の火つよく覚え候時は、火つよき香

を焼き、「扇」などの様に火よわき香は、火あ

いつよく候時は、用捨あるべし。火つよき

香、火よわき香の口傳これあるなり。

一香かおり不審に覚え候わば、木色を見る

事あり。また、両種の名物は殊に木色迄

能く能く見る事、尤もに候。同木のうちにても木

所により、事の外に違い候事なり。

一香通り候中程に焼くまじき香「沈外」、

「赤梅檀」にて候。また云う、この香は勝れたる香通

一「時分」たるに、たれども、に、定、
 指、る、香、も、通、ら、る、に「沈、外」た、く、事、あ、
 り、あ、え、
 一「太子」の返、し、三、度、迄、た、く、べ、し、
 は、無、用、な、り、
 一「蘭奢待」返、し、十、度、ま、で、た、く、べ、し、
 香、な、り、こ、の、字、が、秘、事、な、り、
 一「古木」返、し、三、度、ま、で、焼、く、べ、し、右、三、種、の
 外、に、は、十、種、の、香、な、り、と、も、申、す、に、及、ば、ず、そ、の、外、な、り
 と、も、返、し、取、り、て、置、き、重、ね、て、焼、く、こ、と、あ、る、ま、じ、く、候、
 ま、た、三、種、の、返、し、取、り、て、焼、く、事、い、か、と、ほ、う
 べ、ん、す、る、は、物、を、知、ら、ざ、る、故、な、り、
 一「香爐」の火、よ、わ、く、な、る、時、は、こ、う、箸、に、て、上
 に、穴、を、つ、き、明、け、て、そ、の、穴、の、上、に、銀、を
 置、き、香、焼、く、べ、し、そ、れ、に、て、も、よ、わ、く、ば、返、し
 を、一、焼、き、穴、の、中、へ、立、て、に、入、れ、て、そ、れ、に、て、火

とうとうたる世も人少なり時にお火を
 けく下るるやうなすなりと云ふ
 一香爐に然るゝ客来より床へ御香
 煙おかれと亭主が仁、衆中へ理
 又客来より内印を仁、衆中へ理
 と云て床へ上るもむんうまのてい
 よより覚悟わづ一床へ玉時を
 うり居る一丁を心得者なり
 一名香並びにただの沈、うつりが有るをとり
 やう一段秘事なり。口傳、沈五両に皮物
 の粉茶(ひものこちや)三服程入れて、水にてふたて、
 香を入れて一日一夜つけて置き、その後
 また、よき水にて何度もこしらえ、白物(はくぶつ)を
 おとし、朝日にあて、日つよくならぬ前に
 かげばしにして然るべし。うすよう(薄様)に包み
 申すべく候事、口傳これあるなり。

をほう(焙)ずるなり。貴人御座候時は、少し火を
 つよく取るべし。はなやかに聞し召さるべきためなり。
 一香爐しかるべく候わば、客来より床へ「御香
 炉おかれ候え」と亭主がたへ所望在るべし。
 また、客来の内、功者なる仁、衆中へ理を
 云うて、床へ上げ候ても、尤もに候か。その座のてい
 により覚悟あるべし。床に置く時、盆に
 より口傳第一心得らるべき者なり。

一香爐、火取る心持ち、四色口傳あり。第一の
 秘事なり。底の心持ち、上よわき心持ち、上よわき一分
 おす心持ち、指に覚ゆる心持ちあり。口傳。
 一「法隆寺」は、天竺より太子御取りなされ渡し
 給う香に候。何れの世にも出る沙汰なし。然る
 に「ねずみの穴より鼠引き出して世に
 廣まるよし」を申し傳え候。法隆寺宝蔵に
 籠められ候て、これある故「法隆寺」と云う。また、御名を
 御とり、「太子」とも申すなり。
 一「東大寺」は、御所様御一代一度、奈良
 へ御参詣の時、進物の為、昔より一寸
 四方参り候。然ればまれなる子細に候。但し、「太子」
 よりは類もこれある義に候か。木色三色にこれあるなり。
 一「御(三)吉野」は、「東大寺」のうすみというなり。
 一「逍遙」は、南都法花寺に有りといえり。「東大
 寺」の皮と申し傳えたり。
 一「東大寺」は、御所様御一代一度、奈良
 へ御参詣の時、進物の為、昔より一寸
 四方参り候。然ればまれなる子細に候。但し、「太子」
 よりは類もこれある義に候か。木色三色にこれあるなり。
 一「御(三)吉野」は、「東大寺」のうすみというなり。
 一「逍遙」は、南都法花寺に有りといえり。「東大
 寺」の皮と申し傳えたり。
 一「東大寺」は、御所様御一代一度、奈良
 へ御参詣の時、進物の為、昔より一寸
 四方参り候。然ればまれなる子細に候。但し、「太子」
 よりは類もこれある義に候か。木色三色にこれあるなり。
 一「御(三)吉野」は、「東大寺」のうすみというなり。
 一「逍遙」は、南都法花寺に有りといえり。「東大
 寺」の皮と申し傳えたり。

(一) 一「うたたね」はじめ「うかうか」と立ちかおるなり。
 字は、(一・二・三)以上六つなる故なり。
 一「岩角」奈良えしんいん(恵心院?)にこれあるなり。
 一「赤梅檀」は、我々聞き傳える故、尋ね出す。秘せらるべき
 なり。
 天主の内。
 一「丹霞」拙子(宗信)尋ね出し子細を申し上げ、三条殿へ
 尊意を得、「丹霞」と号すなり。
 一「二見」は、両面の香箱とも云う。また「二見」のうら
 一「丹霞」拙子(宗信)尋ね出し子細を申し上げ、三条殿へ
 尊意を得、「丹霞」と号すなり。
 一「二見」は、両面の香箱とも云う。また「二見」のうら
 一「関戸」は蘭奢待に似たる香なり。名物
 同前に心得あるべし。
 一「太子」「東大寺」焼き後は、前に書き申すごとく、
 「丹霞」「沈外」にてもただ二度も三度も
 しんしやくして不興(ぶきよう)になりそうにも候
 わば、この兩種にていろいろ候わんと、むか
 しよりの定めなり。

一香と同時香炉火よりわらぬ鼻と
 りとふ風情わらぬ事不
 然なるものやわらぬ事不
 一鴨の香爐は銀よりすきと一
 しの方へきてきく一
 鴨の香炉はわらぬわらぬ刻
 どうなるふ首付はわらぬ我
 のふらふらわらぬわらぬ
 よらぬわらぬ
 一又どうしてわらぬ首付は
 しの方へきてわらぬわらぬ
 きやくにまわらぬわらぬ
 貴人の方へきてわらぬ
 一切生き物の香爐と同時前
 一香炉火つよき時は、銀の上、少しわき

一 香を聞く時、香爐、火を取り出る時、鼻を
 かみ、色々に風情あらため候事
 然るべからず候。かよふの事は物ごとにこれある氣遣いなり。
 一 鴨の香爐に銀をおくは、すみ(角)を一つ
 むね(胸)の方へなして置くべし。口傳。
 一 鴨の香爐取りわたしは、羽がいにて割り、
 どうのかたに首(かしら)付き候は、かしら我が左
 のかたへなして聞く。渡し様はじゆん

に取りわたすべし。

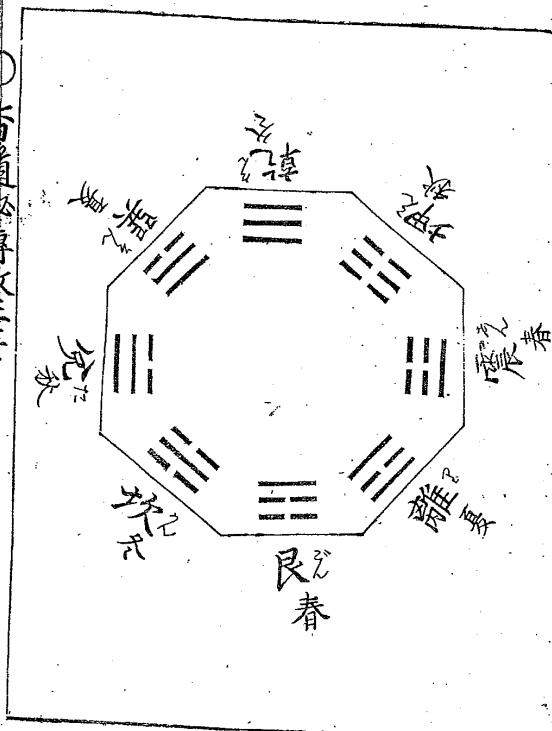
一 また、どう(胴)にてわり、羽がいに首付き候は、
 むねの方、我が右へなし聞く。渡し様は
 きやくにまわし渡し申すべく候。口傳に云う、尾、
 貴人の方へ向かうべからざるなり。

一 一切生き物の香爐、鴨と同時前。請け取りわた
 すべし。

一 香爐火つよき時は、銀の上、少しわき

(三才と木作の図)
 小香と心持あり
 八卦の香爐にて香聞く時は、その季の(卦)
 と面になすように心得らるべく候。賞翫の
 箸並びに盆の内置き合わせ同前。かようの
 事を聞きそこない「四季の灰おしよ
 あるよし」いう、おかしきことなり。

八卦香爐の圖



「八卦香爐の図」

に香おく心持ちあり。
 一 八卦の香爐にて香聞く時は、その季の(卦)
 を面になすように心得らるべく候。賞翫の
 箸並びに盆の内置き合わせ同前。かようの
 事を聞きそこない「四季の灰おしよ
 あるよし」いう、おかしきことなり。

右の条々、口傳の事、若年の時より数十年、三条殿へ懇望致すによつて仰せられ聞け。縦（たとえ）子孫為とも抑め置き候。秘せらるべし。第一、この道別人に相傳え申す族（やから）、努々有るまじく候。その故は、唐物目聞き方以下、能阿弥、真相、珠光、松本、拙者に相究まる由聞こしめされ候えども、當時は存知の者ども、数多これある由に候。香の一儀に於いては、別人存知ざる様にありたく思しめざる由、誠に辱き（かたじけなき）尊意、古今有り難き子細に候。その心得なされ、この一冊外見あるべからず候。自然、志深く執心の仁は、その覚悟見届け、条数の内抜き、相傳あるべし。無文字の上、憚り多き言葉の跡、旁（かたがた）以つて他見あるべからず。その頃、所勞の砌、存し立ち次第、不同に調え置くものなり。

文龜元年九月日
宗信

右の条々、口傳の事、若年の時より数十年、三条殿へ懇望致すによつて仰せられ聞け。縦（たとえ）子孫為とも抑め置き候。秘せらるべし。第一、この道別人に相傳え申す族（やから）、努々有るまじく候。その故は、唐物目聞き方以下、能阿弥、真相、珠光、松本、拙者に相究まる由聞こしめされ候えども、當時は存知の者ども、数多これある由に候。香の一儀に於いては、別人存知ざる様にありたく思しめざる由、

誠に辱き（かたじけなき）尊意、古今有り難き子細に候。その心得なされ、この一冊外見あるべからず候。自然、志深く執心の仁は、その覚悟見届け、条数の内抜き、相傳あるべし。無文字の上、憚り多き言葉の跡、旁（かたがた）以つて他見あるべからず。その頃、所勞の砌、存し立ち次第、不同に調え置くものなり。

文龜元年九月日

宗信

右は志野宗信八十八箇の筆記と
云うて、萬代香道の龜鑑なるもの
なり。甚だ貴賞すべし。房間の刊本、
誤り多きにより校正し畢（おわんぬ）。
保多ふより校正し畢

皆享保甲寅年正月

大枝流芳記

志野宗信筆記考正

一名などともと字一つ衍文（えんぶん）。本書これを削る。
一 然 古板「断」に作る。今これを改む。
一名香一焼きに木がさ云々、この終わりに然らずん
ばこれ程の心持に木がさたるべきなり。
五、六人の時「然らず」と云うより「の時」と云うまで、
後人の注にて、木がさの図ありしもの
なるべし。誤りて本文に混ず。文章うた

右は志野宗信八十八箇の筆記と
云うて、萬代香道の龜鑑なるもの
なり。甚だ貴賞すべし。房間の刊本、
誤り多きにより校正し畢（おわんぬ）。
皆享保甲寅年正月

大枝流芳記

志野宗信筆記考正

一名などともと字一つ衍文（えんぶん）。本書これを削る。
一 然 古板「断」に作る。今これを改む。
一名香一焼きに木がさ云々、この終わりに然らずん
ばこれ程の心持に木がさたるべきなり。
五、六人の時「然らず」と云うより「の時」と云うまで、
後人の注にて、木がさの図ありしもの
なるべし。誤りて本文に混ず。文章うた

香爐の字、**「を」**に改む。
 一 香爐貴人への中、**「取り候わば」**この下のゆずりの「は」重複なり。よつて本書これを削る。
 一 おし板五つかざりの中、**「これにおおいて」**この「い」の字誤りなり。「おおじて」なり。本書これを改む。
 一 可被理「理」の字、異本を以つて「致」にあらたむ。
 一 香袋の結「結」の字、異本「緒」に作る。今本書これを改む。
 一 古木返しと云う條、**「三炷十炷」**と書く。今写本と考え合わせ「三種、十種」に改む。
 一 香爐の火よわく、この、**「つよき明けて」**と云う「よ」の字、衍文ゆえ今削りさる。
 一 名香並びただの沈、うつりがはあるを、この「は」の字、

三十七
 香爐の字、**「を」**に改む。

衍字か、また一本に「の」に作る。今本書これを改む。
 一 香爐火取る心持ち、この中「上平き」この字解し
 がたし。異本にて考うるに「よわき」に作る。今
 本書これを改む。また、心持ちあり 一本、「あり」を「なり」
 に作る。
 一 「三吉野」はこれより「逍遙」に至るまで、
 古板の本、前後錯乱し、「逍遙」の註、
 「八橋」の下に入る。「八橋」の註脱漏せり。「八
 橋」羅國なり。何ぞ東の皮めなりとせん
 や。これ誤りの一証なり。異本数部考え合わせ、
 古板を今本書のごとくこれを改む。また、「古木」
 の註の中、「面白き口傳二つより」と云う
 口傳あり。面白きより口傳ありまで、他本に
 これ無し。考うるに、文意後人の註なるべし。
 誤りて本文に混ず。今これを削りさる。
 一 うたたねの中、「立ちかおり」「里」の字、他本に

大枝流芳校正

志野宗信香合式

一名香合の儀一番より十番迄、二炷宛廿二種人ねも十人たるべし然れ一人より二種宛香を出さるべし。その香に「太子」「東大寺」をば相除かれ、その他十種の内、また、五十種の内を出さるべく候か。むすびに二種通り候香の内、はじめ焼くをば「左」と定め、後に焼くをば「右」と定め、左の香よきと思う

志野宗信香合式

一名香合の儀、一番より十番迄、二炷宛廿二種人ねも十人たるべし。然れば一人より二種宛香を出さるべし。その香に「太子」「東大寺」をば相除かれ、その他十種の内、また、五十種の内を出さるべく候か。むすびに二種通り候香の内、はじめ焼くをば「左」と定め、後に焼くをば「右」と定め、左の香よきと思う

時たの札と、右の香たより毛
 りりゆきりく、左の札と、右の
 の調え様、はば幅六分半、長さ一寸九分。また、厚
 さ一分半に、枚の板を削り、その面に
 我々の名乗りと書く。うらには「左」と一枚、また
 右と一枚書くべく候。包紙をば、「うすよう」
 一枚と八つに切りて、そのはしを細く、名
 紙に裁ちかけて、香の名を上に書き、その
 下に香主の名乗りを書き、四つに畳みあ
 げてひねり、見えざる様にこれあるべし。同じ紙の
 中に香を包み候、おさない人の十炷香とて
 もてあそぶ時の包み候ごとく、何れも口傳
 ありて、その頃お宅興行の時の験あるべからず、失
 念候。惣別、昔「香合」という事、聞くに及ばず候。
 三条殿の御家に「薰物合」と云う事、御興行候。
 その縁を取りて興行仕りたくよし、尊意を得

時は、左の札を打つべし。右の香、左よりも
 かおりまさりて覚えば、右の札を打つべし。札
 の調え様、はば幅六分半、長さ一寸九分。また、厚
 さ一分半に、枚の板を削り、その面に
 我々の名乗りを書き、うらには「左」と一枚、また
 「右」と一枚書くべく候。包紙をば、「うすよう」
 一枚を八つに切りて、そのはしを細く、名
 紙に裁ちかけて、香の名を上に書き、その

下に香主の名乗りを書き、四つに畳みあ
 げてひねり、見えざる様にこれあるべし。同じ紙の
 中に香を包み候、おさない人の十炷香とて
 もてあそぶ時の包み候ごとく、何れも口傳
 ありて、その頃お宅興行の時の験あるべからず、失
 念候。惣別、昔「香合」という事、聞くに及ばず候。
 三条殿の御家に「薰物合」と云う事、御興行候。
 その縁を取りて興行仕りたくよし、尊意を得

以て三珠を^{（三）}珍^{（珍）}貴^{（貴）}に^{（三）}思^{（思）}召^{（召）}され候。後々迄名を^{（三）}残^{（残）}す
興行」と御褒美なされ、前後御指南を以て興
行候。判者、夢菴、跋は三条殿に申し上げ候。連
座のうえは、失念あるべからざる者なり。

右の一冊、写（うつし）進入候事、別して御閑無く、宗温
時より御殿志（ごてんこうざし）の儀と申す。この度、^{（黒金方）}
目聞きを仰せ聞けらるる故、旁（かたがた）以てかくのごとく候。
目^{（目）}聞^{（聞）}き^{（目）}と^{（聞）}申^{（申）}す^{（目）}候^{（候）}事^{（事）}は^{（目）}他^{（他）}見^{（見）}候^{（候）}と^{（目）}も^{（聞）}、^{（目）}こ^{（目）}の^{（目）}書^{（書）}、^{（目）}外^{（外）}見^{（見）}
候^{（候）}て^{（目）}は^{（目）}迷^{（迷）}惑^{（惑）}た^{（目）}る^{（目）}べ^{（目）}く^{（目）}候^{（候）}。

永禄元年月日 省巴

候ところに珍（めずら）しく尤もに思し召され候。「後々迄名を残（す）

右の一冊、写（うつし）進入候事、別して御閑無く、宗温
時より御殿志（ごてんこうざし）の儀と申す。この度、^{（黒金方）}
目聞きを仰せ聞けらるる故、旁（かたがた）以てかくのごとく候。
^{（目）}目^{（聞）}聞^{（申）}き^{（目）}と^{（聞）}申^{（申）}す^{（目）}候^{（候）}事^{（事）}は^{（目）}他^{（他）}見^{（見）}候^{（候）}と^{（目）}も^{（聞）}、^{（目）}こ^{（目）}の^{（目）}書^{（書）}、^{（目）}外^{（外）}見^{（見）}
候^{（候）}て^{（目）}は^{（目）}迷^{（迷）}惑^{（惑）}た^{（目）}る^{（目）}べ^{（目）}く^{（目）}候^{（候）}。

永禄元年月日 省巴

省巴

志野宗信香合之記考正

名香合

「下」の字異本にありと補

五十炷

「炷」の字、異本によりて「種」に改む。

香の名と上

「上」の字の下に「に」の字脱す。今これを補う。

ふん

「ふん」の字、衍文。本書これを削る。

おさあひ

「あ」の字、本書「な」の字に改む。

十種香

「種」の字、異本に依つて「炷」に改む。

何れも口傳ありて、その頃お宅興行の時の

珠數 珠字一本を以つて「珍(珍)」の字に改む。

花に 異本を以つて「尤(もつとも)」に改む。

右の奥書きの中、黒金方 この「黒金」の二字、

恐らくは書き誤りならんか。余未だ考えず。識者の明

解をまつのみ。また、かくのごとく候の下、

の字の上の字、解し難し。恐らくは「前」の字ならんか。

日省「日」の字、上の「月」の字の下にあるべし。

志野宗信香合之記考正

名香合 この下「の」の字、異本にあり。今これを補う。

五十炷 「炷」の字、異本によりて「種」に改む。

香の名を上 「上」の字の下に「に」の字脱す。今これを補う。

見えざるの 「の」の字、衍文。本書これを削る。

おさあひ 「あ」の字、本書「な」の字に改む。

十種香 「種」の字、異本に依つて「炷」に改む。

何れも口傳ありて、その頃お宅興行の時の

珠數 「珠」の字、一本を以つて「珍(珍)」の字に改む。

花に 異本を以つて「尤(もつとも)」に改む。

右の奥書きの中、黒金方 この「黒金」の二字、

恐らくは書き誤りならんか。余未だ考えず。識者の明

解をまつのみ。また、かくのごとく候の下、

の字の上の字、解し難し。恐らくは「前」の字ならんか。

日省「日」の字、上の「月」の字の下にあるべし。

省の字下「巴」字脱す。今、異本に因つて本書これを改む。
 右香合の校正、舊板の異同ここに記して校正の趣きをしらしむ。

大枝流芳考正

志野家六十一種名香目錄

法隆寺 東大寺 逍遙 紅塵 古木 中川 八橋 以上十一種
 園城寺 追加
 似 富士烟 菖蒲 楊貴妃
 般若 鷗鵒斑

「省」の字下、「巴」の字脱す。今、異本に因つて本書これを改む。
 右香合の校正、舊板の異同ここに記して校正の趣きをしらしむ。

大枝流芳考正

志野流六十一種名香目錄

(太子とも)法隆寺(ほうりゆうじ)
 (蘭奢待とも)東大寺(とうだいじ) 逍遙(しょうよう)
 三芳野(みよしの) 紅塵(こうじん) 古木(こぼく)
 中川(なががわ) 法花経(ほつけきよう) 慮橘(はなたちばな)
 八橋(やつはし) 園城寺(おんじようじ) 追加
 以上十一種

似(にたり) 富士烟(ふじのけぶり) 菖蒲(あやめ)
 般若(はんにや) 伽羅大内(かりだい) 鷗鵒斑(しやこばん) 楊貴妃(ようきひ)

青梅 飛梅 種嶋 花梅 月 斜月 紅葉賀 千鳥 八重垣 明月 卓 丹霞
 薄標 禁裏様 龍田 白梅 老梅 花雪 花宴 花散里 花形見 明石
 上馬 雲井 二葉 祢覚 薄雲 以上五十種

青梅(あおうめ) 飛梅(とびうめ) 種嶋(たねがしま伽羅・追加)
 薄標(みをつくし) 月(つき禁裏様) 龍田(たつた)
 紅葉賀(もみじのが) 斜月(しやげつ) 白梅(はくばい)
 千鳥(ちどり) 法花(ほつげ 追加・大内) 老梅(ろうばい 追加)
 八重垣(やえがき 追加) 花宴(はなのえん) 花雪(はなのゆき)
 明月(めいげつ) 賀(が) 蘭子(らんす)
 卓(しよく 追加・御物) 橘(たちばな) 花散里(はなちるさと 追加)
 丹霞(たんか 追加) 花形見(はながたみ) 明石(あかし)

都合六十一種（一）之内十三種追加の分
右、老父宗信に傳授也。今、我知命
の後、別して執心に依つて口傳ども一事を遺さず
末子不寒齋省巴に（干）相傳え畢矣（おわんぬ）。これに依つて
聊か（いささか）外見有るべからざる者なり。

志野入道

宗温

天正式霜月日

志野不寒齋

右、宗信子宗温が筆記する所
の六十一種の名香の目録なり。古板
本、誤字、脱漏有るを以つて、今、校正増入せ
しむるものなり。

享保十九年正月

大枝流芳記

都合六十一種なり。この内十三種追加の分。

右、老父宗信、慥かに傳授する所なり。今、我知命
の後、別して執心に依つて口傳ども一事を遺さず
末子不寒齋省巴に（干）相傳え畢矣（おわんぬ）。これに依つて
聊か（いささか）外見有るべからざる者なり。

志野入道

宗温

天正式霜月日

志野不寒齋

右は、宗信子宗温が筆記する所

の六十一種の名香の目録なり。古板

本、誤字、脱漏有るを以つて、今、校正増入せ
しむるものなり。

享保十九年正月

大枝流芳記

志野宗温六十一種名香記考正

紅鹿

鹿の字、本書「塵」に改む。

追加

舊板、この二字、香の名の如く大字に書いて、「盧橘」(はなたちばな)の左に例す。今、異本を以て改め、細字となし。「園城寺」の下につづくこれ十種の中、「園城寺」一種追加せしと云う注なれば今これを改む。

魔鵠斑

「魔」の字本書「鷗」に改む。

老梅の下、追加の細注を脱す。今本書これを補う。「八重垣」「丹霞」の下もこれに同じ。

「蘭子」のかた、「古」の字、旧板にあり。今これを削る。

終わりに「上馬」の一種、舊板に脱す。今これを補う。

五十炷

「炷」の字、「種」に作るべし。

六十炷

「一」の字、舊板に脱す。また、「炷」當に「種」に作るべし。

十二炷

異本を以てこれを改む。

右の書、奥書きの中、省也「この也」の字「巴」の字

なり。異本を以てこれを改む。「省巴」は宗温の子なり。

右、六十一種名香の記、舊板、誤字、異

志野宗温六十一種名香記考正

紅鹿

「鹿」の字、本書「塵」に改む。

追加

舊板、この二字、香の名の如く大字に書いて、「盧橘」(はなたちばな)の左に

例す。今、異本を以て改め、細字となし。「園城寺」の下につづくこれ十種の中、「園城寺」一種追加せしと云う注なれば今これを改む。

魔鵠斑

「魔」の字本書「鷗」に改む。

「老梅」の下、「追加」の細注を脱す。今本書

これを補う。「八重垣」「丹霞」の下もこれに同じ。

「蘭子」のかた、「古」の字、旧板にあり。今これを削る。

終わりに「上馬」の一種、舊板に脱す。今これを補う。

五十炷

「炷」の字、「種」に作るべし。

六十炷

「一」の字、舊板に脱す。また、「炷」當に「種」に作るべし。

異本を以てこれを改む。

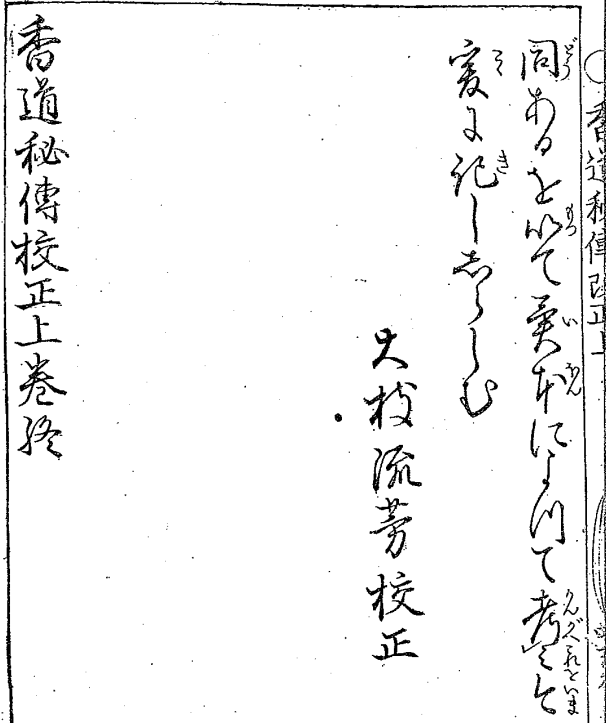
十二炷

本書、「十三種」に改む。

右の書、奥書きの中、省也「この也」の字「巴」の字

なり。異本を以てこれを改む。「省巴」は宗温の子なり。

右、六十一種名香の記、舊板、誤字、異



同あるを以つて、異本によつてこれを考え、今ここに記ししむ

大枝流芳校正

香道秘傳書校正上巻終り

【参考資料】

『香道秘傳書・米川常白香道秘傳抄』

香書に親しむ会発行 清水書院 平成十七年十月刊

令和二年八月

『香筵雅遊』國井和裕

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。